

Busby, Thomas Lord

Costume of the lower orders in Paris.

s.l. London, ca1820. (文献番号5-19)

Hiler p.129 Colas 493

バスビー著

パリ下層社会の服装

19世紀初頭のパリの物売りや下層民を、扉を含めて28枚の手彩色線刻銅版画に収めた、小型ながら美しい服装図集。各頁の下にそれぞれフランス語と英語のタイトルが付されているだけで、解説文はない。この点ではボスの「パリの呼び売り」(文献番号5-15)と同類ではあるが、イメージは基本的に異なっている。というのも、ボスのそれは彼のちみつ(緻密)な性格を反映して極めて写実的である一方、生態描写に優れ、シリーズになってはいるものの一枚づつが独立した画面を形成している。これに対してバスビーのそれは、ずっと軽快で散文的であり、ポーズも生硬でありながら個々の物売りの性格と雰囲気がよくとらえられているのは、単に手彩色の見事な調和感のせいだけではなからう。主題の配列は次の順になっている。扉・ポスター張り(ポスターに本書の書名が刷りこんである)、犬商人、ココア売り、歌の行商、むち売り、水運び、細引き売り、パンとぶどう酒など、ミルク売りの女、コルデン・ピピン種りんご、ぶどう売り、ストーブ売り、煙突掃除、木炭売り、はさみ研ぎ、壁紙売り、バター屋、どぶ掃除、かご屋、ビール売り、木ずり売り、くず拾い、パンケーキと揚げ菓子屋、インク売り、がちょう売り、富くじ札、いちごときいちご、かつぎ屋である。



バスビーはロンドンのミニチュア肖像画家で、1804年と1821年のロンドンの王立美術院展に出品している。他に3冊の作品集が知られている。すなわち、「ロンドン下層社会の服装」1820年、23枚。「主都の下層社会の服装」1820年ごろ、24枚。「ロンドンの市民と軍人の服装」1824年、4枚。などであり、いずれも下層の人々を取り扱っている。こうした下層の人々の服装の特色は、身分象徴を最大の機能とした上層の服装とは異なって、いつも働きやすいように、単純でゆるやかで便利にできており、布地も厚く丈夫である一方、刺繍、レース、ひだ飾りなど特定の飾りもなく、色も地味なのが一般である。こうした服装の性格は現代服の底流ともなっている。図は「くず拾い」。